季刊

四季

第七号

四季社

一九八五年七月十日発行

定価 三〇〇円

目　次

季刊四季・第七号

ダヴインチ「女の頭部」復写……表紙
「四季」第六十六号編輯後記……表紙裏
辰雄三十三回忌……田中　克己　4
はなうた（二）……植村　清二　6
日の丸の旗と日の丸の歌のこと……山住　正己　10
セザンヌの自画像……小高根太郎　13
告別……浅野　晃　14
山村遊行……高橋　渡　16
小金井山荘２……国友　則房　20
窓の外の道路……山崎　雪子　22
短歌一首……藤沢　桓夫　24
夕べ……杉山　平一　26
巴里追想二題……石濱　恒夫　28
藤の花……牛尾三千夫　32
一琴一硯之斎……たかはし　しげおみ　34
世界……江頭　彦造　36
言……石山　直一　38
シンガポール終戦俘虜旧詠抄……河村　純一　40
呉じいさん……福地　邦樹　42
コルホーズ・夏……大野沢緑郎　44
室内から……小杉　茂樹　46
雪のなかの記憶……藤野　一雄　50
薔薇……花井たづ子　52
会えない日……南川　正純　54
同人名簿……56
同人略歴……57
同人規定・会員規定……58

「四季」第六十六號・編輯後記

五月十二日の新聞で、萩原朔太郎さんのお亡くなりになつたことを知つて、僕は飛びあがるやうに驚いた。去年の十一月ですから、萩原さんが少しお悪いやうなお噂は聞いてゐたが、それほどお悪くなられてゐようなどとは全然知らなかつた。

あまり突然な悲しみなので、いまはなにも云ふべき言葉を知らない、『宿命』のなかに「人の死ぬや善し。詩人の死ぬや悲し」そんなことをお書き残しになられてゐることなどが僕にはただ痛切に思い出されるばかりである。

＊

神保、田中両君は任地でずつと元氣に暮らしておられる由。ついこのあひだも田中君からこんなお便りをいただいた。

「熱帯の風物も捨てがたいものがあります。ゴムの木、夜来て鳴くやもり、佛桑花、駒鳥やるりに似た鳥、蛇遣ひなど皆詩趣を帯びてゐます。置き忘られた書棚にはアメリカの駄小説にまじつてキップリングがあります……」

しかし、田中君も神保君も、萩原さんの死を聞いたらどんなに驚き悲しまれることだらう。

また独逸にゐる芳賀檀君は、何処で、いつ、われらの大いなる詩人の死を知ることだらう。それにしても、彼自身、元氣で暮らしてくれるといい。（後略）

堀　辰雄

辰雄三十三回忌

田中克己

堀多恵様から今年の五月二十八日は辰雄の三十三回忌で、場所はどこどこ、時間は午後五時、はじめに「曠野」の暗誦があるとのことだった。わたしはこれが堀さんの最後のおつとめかと喜んで家内と早々に出かけた。三十分早く会場につくと、多恵様はすでに受付にをられた。席券を頂き、早々入場すると一番で、上席で向いは朔太郎の会々長伊藤信吉氏であった。最上席には堀さんの愛弟子というか中村真一郎氏で、向いが遠藤周作君、中村氏は新夫人同道だった。まもなく堀さんの晩年の作「曠野」の朗誦がはじまった。何とか賞をもらわれたという女人の暗誦で、わたしはその一言も誤りのない記憶力にびっくりしてきいていた。そのあと、堀さんの「驢馬」時代の友だち佐多稲子さんが簡単に堀さんの思い出を語られ、ついで中村氏が、そのあと室生朝子さんが「辰ちゃん」の思い出で、あとはフランス料理が運ばれた。静かな会であって、わたしは向いの伊藤さんに朔太郎の会が来年生誕百年ときいて、ぜひ案内して下さるよう頼んだ。堀さんも朔太郎は大いに尊敬し昭和十七年その亡くなられた時、「四季」に朔太郎特集を出し、年譜を作られた。わたしは北川冬彦や神保光太郎と同時に文士徴用というのを受けて、シンガポールにおり、朔太郎の逝去は翌日毎日新聞支局で新聞（飛行機で来た）を見て知り、落涙した。シンガポールもうるさくて、スマトラのメダンへゆくこととなり、軍票交換をたのみに行って偶然知ったのだから、びっくりもしこの不世出の詩人の急逝におどろいたのである。ただしスマトラへ行ってから故人の手紙とハガキとが来て家内が配給の酒をもって行った礼と、透谷賞に推薦した云々とあるのを見て、先生との因縁の深いのを感銘したのであるが。

八時ごろまで料理が運ばれ、デザートのメロンを平げていると、伊藤さんが「僕はもう食えないから」と、自分の分をわけて下さった。わたしは大好物なので喜んで頂き、あとコーヒーでお開きとなった。

出口には多恵子さんの「来し方の記・辰雄の思い出」という新刊書(花曜社刊）が積んであって、一冊ずつ持って帰るようにとの多恵子さんのお話だったのでもって帰り、翌日読んで、才筆に感心した。才筆は前から知っていたが、看病もさることながら、この療養記で、辰雄氏の好き配偶を得られたことをわたしはつくづくと思い知った。この次は五十年か、わたしはもういないし、多恵子さんもいないだろうな。多摩墓地のお墓はいま大学生の養子さんが見てくれると安心している。堀辰雄と横書で1904—1953とあるだけのお墓もわたしは昭和二十五年にお参りして、感心して（あまりに簡単なので）その後ごぶさたしている。来年の五月二十八日には家内と散歩かたがたお参りするつもりだが、お天気者のわたしなので確かとはいえない。とまれ堀さんの三十三回忌は無事に、しかも非常に堀さんにふさわしくすんだことを「四季」の同人や読者にお伝えしておく（五月三十一日)。

はなうた（二）

植村清二

大正のはじめ、藝術座の「復活」の舞台で、松井須磨子の唄った「カチューシャの歌」は、蓄音器のディスクに乗って、津々浦々に弘まった。そのあとを引き継いだのが「どん底」の中で歌われる「漂泊（さすらい）の歌」である。作詞者も作曲者も誰だか知らない。その頃早稲田に在学していた兄が、休暇に帰って来て歌うのを聞き覚えた。「行こか戻ろか、オーロラの下で」にはじまる第一節も悪くないが、いつも唇頭に上るのは第二節である。

燃ゆる思ひを、荒野に曝（さ）らし
馬は氷の上を行く
止まれ幌馬車、休めよ黒馬（あお）よ
明日（あす）の旅路が、ないぢゃなし

妹むすめがまだ幼い頃、僕がこの歌を口誦（ずさ）むのを聞いて、
「かわいそうだ」と声を上げたことがある。
やはりその旋律が、もの悲しい情緒を、呼び起したのであろう。

昭和の初年は、いわゆる「戦間（アントル・レ・ゲル）」の時期で、短かくて不安定ではあったが、市民には休息が与えられた。ルネ・クレール監督の「パリの屋根の下（スー・レ・トワ・ド・パリ）」などの映画には、憂鬱で甘美な抒情が流れている。

鐘が鳴る、鐘が鳴る
マロニエの並木道
パリの空は青く晴れて
楽しかりしむかし

煙突の沢山あるパリの町の屋根が、スクリーンにせり上って来るのが鮮やかに目に浮かぶ。考えて見ると、五十年前には、僕も若かった。

条件反射でもないが、ある場所、ある時に、きまって唇頭に上るはなうたがある。夕食を済ませて、少しぬる目の湯を張った浴槽にどっぷりと身を沈めると、自然に唇を洩れるのが三種ある。鉄幹の「人を恋ふる歌」に、晩翠の「星落秋風五丈原」と「馬前の塵」である。どれももとから譜があるわけではないのに、随分早くから、きまった旋律で歌われている。何時何処（いつどこ）で作られたものか、考証家に聞いて見たいものである。

「人を恋ふる歌」は、かなり長い。しかし歌うスタンザはきまっている。

四たび玄海の浪を越え
韓(から)のみやこに来て見れば
秋の日悲し王城や
むかしにかはる雲の色

粗野に違いないが、明治の書生の感慨がある。

「星落秋風五丈原」は、叙事詩だから「人を恋ふる歌」よりも、まだ長篇である。これも終りに近い一節が、おきまりである。

魏軍の営も音絶えて
夜は静かなり五丈原
起たずと思ふ今もなほ
丹心国を忘られず
病を扶け身を起し
臥帳掲げて立ちいづる
夜半の大空雲もなし

高潮した感情が、よく表現されている。晩翠の秀作の一節であろう。

「馬前の塵」は、中ほどの数スタンザである。

サン・ベルナアの峯高く
雪満山を埋むれば
響は凄しアバランチ
難きを凌ぎ険を越え
見おろす大野草青し
馬は肥えたリマレゴウ

サン・ベルナールは、大も小も峠である。峯というのはおかしい。それにしても晩翠は「満城」とか「満山」とかいう言葉を、よく使うものだ。

湯から上って、汗を引かせて、マイルド・セブンを一服くゆらして、さて寝床に入る。軽い随筆を四・五頁読んで、スタンドを消すと、ぼんやりした意識の底で、低く旋律が揺曳する。声には出ない磯節である。

沖の暗いのに　苫(とま)とれ苫を
苫は濡れ苫　苫とれぬ

アダジオは三回ほどで、ヒプノスの神は、静かにやさしく抱擁される。

日の丸の旗と日の丸の歌のこと

山住正己

四月二十九日、阿佐谷の北側、気象研究所跡に馬橋公園が開園したと聞いていたので、散歩に出かけた。好天の下、芝生では家族連れが弁当を開き、子どもたちは流れる水と戯れたり、滑り棒とでも呼ぶのか、滑り台の代りの鉄棒二本を使い、思い思いのかっこうで滑り降りたりしていた。これは、まことに平和な光景であった。

しかし、公園へ行く途中、数十軒に一軒という割合だが、日の丸を門口に立てている家のあるのが気になった。この日は天皇誕生日でテレビによると皇居参賀の人々が日の丸の小旗を打ち振っていた。こちらは、まさに旗の波という光景であった。

中学三年生の夏に敗戦を迎えた私には、あの日の丸は理論的よりも、まず感覚的にどうしてもなじめない。日の丸というとすぐに思い出すのは、戦時下、出征兵士を送る場面であり、新刊の藤井忠俊著『国防婦人会』（岩波新書）の副題に「日の丸とカッポウ着」とあるが、この二つが右の場面につきものであった。

そして日の丸を歌いこんだ歌を思い出す。まっ先に浮かんでくるのは、

「母の背中に　ちさい手で／振ったあの
日の　日の丸の／遠いほのかな　思い出
が／胸に燃えたつ　愛国の／血潮のなか
に　まだ残る」

に始まる『日の丸行進曲』である。蘆溝橋で日中戦争が本格化した翌一九三八年の作であり、これは歌いやすいせいもあり、ずいぶん聞かされ歌わされた。戦後、大学生になってからこの歌詞を読み直し、母親に背負われたという誰にとっても懐しい思い出と、愛国の血潮とを結びつけるのは巧妙でずるい手法だと腹立たしかったことを覚えている。愛国の血潮はどういうところで燃えたったか。この歌の四番はつぎのとおりでかる。

「去年の秋よ　つわものに／召し出だされて　日の丸を／敵の城頭　高々と／一番乗りに　うち立てた／手柄はためく
勝ちいくさ」

ここで城とは、南京城など中国の都市の城に他ならない。日の丸は侵略の先頭で打ち振られた歌であった。同じ年につくられた「皇軍大捷の歌」には、

「国を発つ日の　万歳に／しびれるほど

の　感激を／こめて振ったも　この腕ぞ
／今その腕に　長城を／越えてはためく
日章旗」

とあった。長城は万里の長城以外には考えられない。

一昨年秋につづき今春も用あって中国を訪ねた。迎えてくれる中国の方々は口々に中日友好の重要性を語る。しかし蘆溝橋には「前事不忘　後事之師」という碑が建てられ、南京の江東門付近では「侵華日軍南京大屠殺死難同胞紀念館」が建築中であった。日の丸の旗をたてたり、打ちふることは、私にはとてもできないのである。

セザンヌの自画像

小高根　太　郎

はすに向けた横顔から、じろりとこちらをにらんでいる。がっしりしたあごは強情我慢の相。不敵な面構えのこの老人は、とても一筋縄ではいかぬ男。好んで彼が描いたサン・ヴィクトワールの山のように、傲然とひくい下界を睥睨している。

ちょっと彼はベートーヴェンに似てはいないか、天がけるわしのような誇り高さにおいて。絵画と音楽のちがいはあるものの、骨太でゆるぎない構成力、はげしいパッションの燃焼と、それを超えて到達した古典的な諦観において、二人の作品にはどこか相通じるものがある。

ああ、この世の中には、何とえらい人々が沢山いることか。それにくらべて私自身のおろかさと無能とは、我ながらあきれはてるだけ。不精ひげをなでながら、うらぶれはてた気持でセザンヌを見る。

告別

浅野　晃

坊やたち　たのしかつたな
つぎの生にも
いつしよに生まれあはせて
いつしよに遊ばうな
夏になればまた海へゆかう
おもひきり泳がう
さあしつかり手を握るんだ
いいかいおまへもおまへも

なにか困つたことや苦しいことがあつたら
大きな声で
天にむけて
おぢいちやんと呼ぶんだ
いいかい大きな声で
おぢいちやんと呼ぶんだよ

（定本淺野晃全詩集から）

祖父のいのり

田中克己

四か月ぶりにまた孫に会った
せは変らないが手足はやせたやう
頭が大きいのも祖父ゆづりだらう
祖父は菓子をやったりくすぐったりして
できるかぎりのご機嫌をとった
最初に入れ歯をはづして見せると
孫は目を丸くして見つめた
はめるとまたはづせといひ
これを二、三回くりかへすと
自分の歯をもぬいてくれといふ
祖父にはそんな力はないが
おまへが入れ歯をするやうになるまで
世界が無事で平安なことを祈らう

山村遊行

高橋　渡

そばかすだらけの名前の変わるのはいいことだ
女中がお手伝いさん　髪結いがヘア・デザイナー
変わって息づく　息づいて見はるかすかなた　もものはな
しかし　花より団子　息つぎを忘れることはないだろうか

三層の屋根に水煙相輪　見返りながら　峠の道にかかる
畑にトマトうれ茄子はみのり
いま六月　それら端境期をねらっての小商品
つゆは終りにちかく空が青い　農薬撒く人は棚田に忙しく
農地解放　小作百姓は自作農民　実も名も変って四十年

いつか土をつくることを忘れ　商品生産者
畔には自家用車
小刻みなインフレーションは中流の意識の過剰をそだて
観光バスから飛びだした空缶が鼻をかすめる
砂の人となりおれは息をつめ　おどろおどろに目をあける
小さな花びら　昼顔が赤松の下枝にはっては咲いている
やっと　峠をのぼりつめた
八角三重の塔は青葉のなかに沈黙の長さで立っている

呼び名の変わるのは　ビーブ　ビーバ　ばんざいばんざい
こえは風にのってちぎれる
＜またの八月十五日……＞
帰ってくるこえは杞のひとのゆめのたわごとなのだろうか

怠惰な日に

グラスを手に眠ったらしい
朝がきて
準備もない授業がはじまる
透谷の手紙を読むわかいこえをききながら
うつらうつらと　あいにいく
入れ墨見えないものの筋肉質の手がのびる
ひるんだらしい
覚め
男の愛を声にのせ　上高地の光太郎に及び
またつづきをきいて
修羅の人　賢治の愛
その秘めたうつつ　ゆめにゆめをかさねる

あけた目に
真摯な学生がいる
そそぐその六根は聴きながら読んでいる
〈あはは……〉
〈ほほほ……〉
観ることで自在　菩薩観世音
とり継ぐに銀のこえのマリア
すみに澄んだ天の海にみなぎる寛恕の季節
さざんかこぼれ
わかい声にのって　品川から透谷が会いに来る

小金井山荘2

(2) 天の声

国友則房

三年越しに　眼科医に通い
山荘から　西へ　二十分も歩くが、
老後の保健には　持って來いである。

主治医は　男盛りの　博士(ドクター)だが
消毒好きで　とても清潔な感じだし
眼球図を指して　親切に教えてくれる。

流行(はやり)すぎて　待たされ通しだが、
常連の　幾人(いくたり)かは　顔見知りだし
それも　我慢の為(し)どころだろう？

治療が済むと　白衣の天使から
病院を出るとき　受付からも
〝お大事に　どうぞ！〟と送られる。

平凡な　決り文句のようだが、
氣が重い　患者の耳には
なんと　天の声に　響くことか！

窓の外の道路

山崎雪子

窓の外の　眞夜中の　道路は
やっぱり　不思議な　白さで
闇にうかんでいて
　二十一世紀
あの　ミルク・ウェイの星の一つに
生き生きと

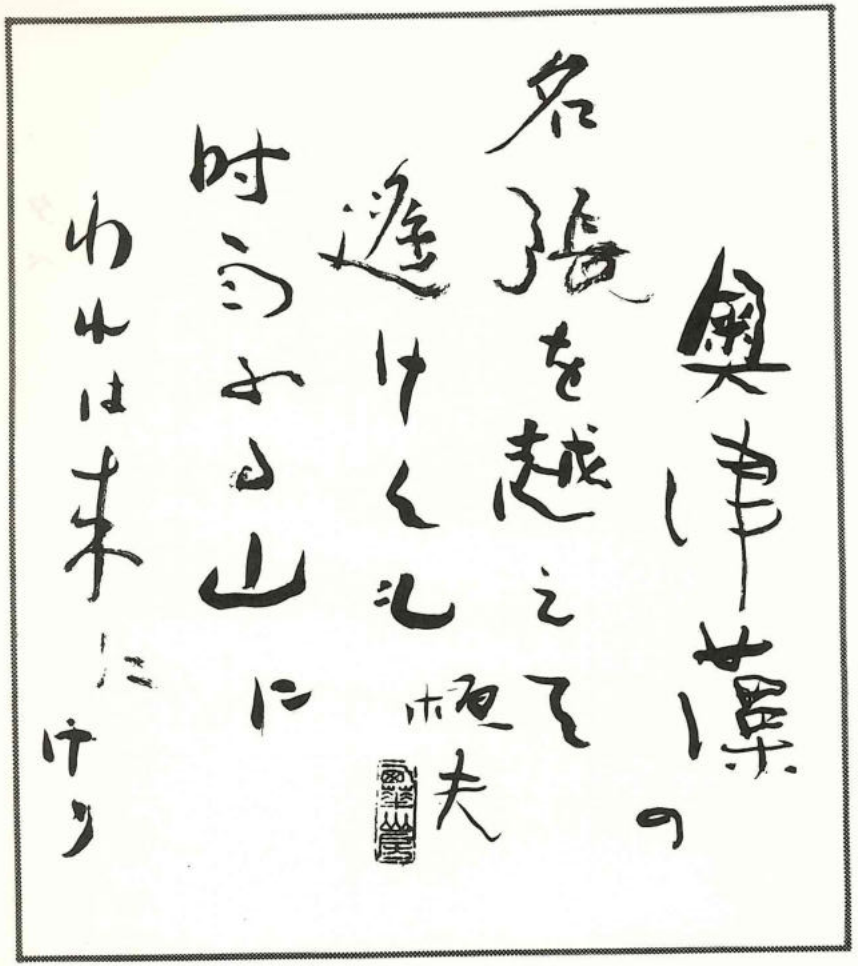
胸に灯をともし　生きて
私がもし行くことが出来ても
歩を出すのは　ここの　この道路
　白い乳を澤山もって
　それをふり撒きながら
　未来の生活星宿図
窓の外の　道路は　いつも

短歌一首

藤沢桓夫

奥津藻の
名張を越えて
遥けくも
時雨ふる山に
われは來にけり

――菰野湯の山温泉にて作る



夕べ

杉山平一

町のざわめきも止んだ

森が黒くなつてきた

森のふちが　銀色に

さんらんと輝やき出した

音楽もなく

歌もなく

叫びもなく

ことばもなく

ひつそりと

だまつて

しずかに

あゝ

月がのぼつてくる

巴里追想二題

石濱恒夫

異邦の都会にて

ガール・サン・ラザールの裏通り
　暗闇にひっそりと佇つ女たち
おれはどこにいても放浪の詩人だが
　きみにはあの街並みの古壁がいい
　　その昔のラヴィニアン街

パトー・ラヴォワールに棲んだ
秀れた異邦人画家たちのように
　パリのためにきみがあって
　　きみのためにパリがある
　　おや
　　ソール街？
あの樹には見憶えがあるね

パリのお店やさん
―カオリちゃんに

夫婦で幼ない娘にはじめてのパリ見物
八百屋さんで買ったマスカットの種を
ひと粒づつ吐き散らして歩いていたら
リュクサンブールの公園の裏口へでた
シャンゼリゼ大通りはテラスカフェも
観光の外人さんとおのぼりでいっぱい

ノートルダムもエッフェルも長蛇の列
なんてたってパリは裏通りにかぎるさ
歴史と生活との日常が泌みついていて
お菓子屋さんではボンボンの花ざかり
セーヌよセーヌよサンドニの鐘が鳴る
こうしてひとりの画家が消えていった

〈山口殖遺作展〉

藤の花

牛尾　三千夫

昨年五月十五日午後二時過ぎ京都
着、それより山路興造君と二人し
て、奈良春日大社に参拝し、多年念
願の藤の花を見る。

幾千年の藤の花房　風やめば、しづかに垂りて、美しくもあるか

夕かげは、すでに深まりて、仰ぎ見る　藤の花房ねむらんとする

仰ぎ見る　藤の花房　木より木に、わたりて咲けば　行方知らずも

風吹けば、幾千の花　揺れやまず、神の森木の　花簪か

むらさきは　灰指すものぞ、藤の花。夢のやうなる　今日の一日（いちにち）

「早乙女の　かけた襷の結び垂れ」と、藤を詠（うた）ひし、古人（いにしへびと）あはれ

帰るさに、鹿の遊べる処まで、近づきしかば、鹿も寄り來ぬ

飛火野の　若草山の夕ぐれに、人一人なく、天の風吹く

奈良に來て、美しき人に逢ふことも、我等にはなく　帰りか行かむ

一琴一硯之斎

たかはし　しげおみ

生い茂ったユーカリの葉が
日ざしをさえぎってくれるので
わが書斎は涼しくて　終日
適当に明かるく　暗い

カナカナが鳴きはじめたから
いざ絃(いと)を合わせて一節歌ってみようか
硯に一滴の水を足して
それを書きとめてみようか

今年の夏はなにごともなかったが
最後(つい)の便りもないままに消えていった
古い友のひとりひとりを偲び

いざ酒を酌もうか　盃をかかげては
「われ古人を思う」　そが
わが書斎の近年のならわしなれば

――堀辰雄夫人の「大事な古印」を読んで

世界

江頭彦造

世界をつなぐのは
愛

雪のなかに
北極と　南極に
向いあって
立っているように

慈悲
恕
もののあわれ

格子戸の　向こうに
ちらりと　ひらめいて　過ぎた
あでやかな　姿

天上に　咲く　こぶしの
白に
歓呼する　幼な心

時を　きざむ　生きの　心臓に
爽やかな　風を　おくる
白い　額
大洋に　はろばろ
沈んで行った
永遠の……

言（ことば）

石山直一

「初めに言があった
言は神と共にあった
言は神であった」

この事の大いなる秘義に
私は心をうたれる

初めに語りかけ給うかたと
聴くもののあるところに
根源的な人格の世界が開かれる

「アダムよ、あなたはどこにいるのか」
ほんとに、私達はどこにいるのだろう

初めに語りかけ給うかたがあって
森羅万象が語りかけ初める
そして、その中心に
イエスの十字架

「あたたがたはわたしをだれと言うか。」
ペテロは答えて言った
「あなたこそ、生ける神の子キリストです」

この事の大いなる秘義に
私は心をうたれる

シンガポール終戦俘虜旧詠抄

河村純一

壁に貼れる世界地図なる日本の色の赤きを悲しみにけり
埋みたる防空壕の土踏みてをり平和はくらく来りけるかも
写真類を焼却しをりアンダマンより持ちて帰りし杖を焦がして
軒に坐して遠つ没り日に真向ひぬ裸の吾は心呆けつつ
蠍座の光恋しみ居たりけりとらはれ小屋の夜くだちにして
真輝く天つ光に愁もなくタピオカ畑にマンデーする吾は
刀(たち)すてて腰の軽きを喜びつつ赤埴の道一すぢをゆく
とらはれははかなきものか雨凌ぐトタンの屋根に心足らへる

軒端にて顔洗ひつつ新しき小さき日本の領土を思ふ
とらはれて昼顔を見ゐる一ときをわが一生のなにと言はむか
ニッパ葺きの屋根に時雨の音ありてむらぎもの心しづもりゆくも
小屋ぬちに真直に立てる柱ありて梁支へたるを淋しみてをり
かにかくに秋の思ひの深かりきとらはれ小屋の夜半のスコール
梁の穴に蜂の出入りを見つつをり俘虜とふ時期のホモサピエンス
俘虜の夜と切り放ちがたき聯想は息づきゆるき蛍の光
白帆浮ぶ海の羨しも空晴れて日本に帰る船路恋しも
憧れもなく坐しゐたり黒雲のみだるる中に星を見たれど
ゴム林の炊ぎの煙目にしみてとらはれ小屋に夕さりにけり

呉じいさん

福地邦樹

朝鮮人の呉じいさんも拾い屋である。彼はしかし、町で一番の預金者で、銀行が年に二三回料理屋に招待するのだとうわさされている。夜中の十二時頃までリヤカーを曳いてダンボールを集めてまわる。川ぶちの彼の家の横は、畳んだダンボールの山と、がらくたで一杯だ。

もう八十になろうという呉じいさんの長男と、私は小学校が一緒だった。呉は背が高くいつもにこにこしていて落ついていたので、皆から余り疎外されていなかった。今は他郷で暮しているらしい。次男は英語塾をひらくインテリで、その一家と呉じいさんは暮している。

私は外で飲んで終電車などで帰ってきたりしたとき、もう車も通らなくなった暗い商店街を、背が元来ひくいのに更に腰がすっかりまがってしまった呉じいさんが、ダンボールを山のように積んで、自転車を歩いて押しながらリヤカーを曳いてゆくのに出会うことがある。

呉じいさんは、知りあいに出会うと、血色のいい丸顔に、人のよさそうな笑顔をうかべる。しかし大抵は無表情で、かといって苦しそうな素振りもなく、言ってみれば働くことの極意のような淡々としたふうをして、雨の日も黒い古めかしいゴム合羽を着てリヤカーを曳いているのである。

コルホーズ・夏

大野沢　緑　郎

あの声音は実存の地平からのものか

暮れなずむシベリアの夏
白夜にとばりのおりる頃

とおい野面から娘たちのコーラスが聞えてくる
だれがリードするでもない　寄りそいの
美しい透きとおるハーモニーが
農家（ハータ）の床にごろ寝する
ぼくらのゆめに甘くまどろみ　はいってくる

いくばくの刻なく白白明けのあてない明日へ
何処からともない　せめてもの恩寵と

夜を歌う異国の娘たち
眠りもしらない夜空はてしなくながれ
微風のようにひろがっていっている
いまもロシア風の建物がそのままに緊迫する
ブラウン管の風景に息つめる

ポクラニーナヤと彼らがよんでいた
わびしい国境の町とそのむこうになってしま
　ったぼくらの空が

いまありありと映っている
あのときのまま　映しだされている

室内から

小杉茂樹

球(ボール)が言葉のようにやりとりされている
近所にできたテニスコートみたいな
駐車場

もう先(せん)　戴いていた本をひらいている
一五頁のところが気にいる
私より
二つ年上の語学者

父と子が　汗して
ボールをやりとりする
音は

空席のコートを占め
確実な速度の調律のもと
　いい会話です
　素敵な調べです

「―陽は　照ったり　翳ったりして」
私は　きみの
白い美しい頁をとじる。

タ　ン　ポ　ポ

フリージャとか　アネモネとか
カトレアとか　そういうのは忘れた
遠いどこかで　僕を呼び旗を振る
人がいた
多分

忘れた町の　花屋のあるじだろう
若い日
お嬢さんのために費やした時間で
識り合った人だ
しかし
だいぶ刻がたつ
新しい道もできた
新し道のアスファルトの端に
六十年まえのタンポポが
議員さんのバッチをつけて立っていた
――金ピカの。

夏の客

聲をたて
泣ける虫は　まだしあわせである

陽盛りを　子供のいない夫婦が
訪ねてきた
飲物に
カキ氷を出し
レモンの蜜をふりかけると
若葉　青葉
の夏景色だ

〈若く　美しい日は短すぎる〉

氷の眠っている
無言の内側が
崩れそう　崩れるか
ふたりの間（なか）・・・

雪のなかの記憶

藤野一雄

積る雪は　舞わずに落ちている
単調に昼間の秒が　きざまれている
城の矢倉と石垣と濁ったまま氷っている濠
それらへ続く　松並木
余白にみちた景色を
門長屋の格子窓から　僕は眺めている

無韻の時が移って
なかばは雪に埋もれている城下の
大工町鍛冶屋町紺屋町桶屋町魚屋町
人びとは密やかな秩序のもとに暮していた

曽ての我家の血統は　この城下にはなかった
なのに覚えのない記憶のなかに還っている

僕は夏の終りに生れたのに
この世への意識に　目覚めたのは
祖母の　ねんねこのなかで
ほいほい　と云う声に
しきりに雪が降っていたのだ

薔薇

花井たづ子

塀の外に薔薇の花びらが
こぼれていた
自転車から降りると
かがんでひらい
ほんのりといい香がたつのを
袋にそっと入れた

あれからそこを通ると
薔薇の花はどこにもなく
緑の葉だけが上をむいていた
本当にあったことなのか
夢だったのか
側を通るたびおもっている

会えない日

南川正純

昨日会ったのに
もう、あなたの声がほしい
私は今、じっと
電話の前にいる。
面影となって
泡の様に消えて行くの
それが溜息となって

侘しさに変ると
〝いらだち〟が体の中をかける
そんな時ベルが鳴る
願いをこめた手が瞬間
レシーバーに触れ
待っていた声
私は別人の様な声になる
いつもの会話が、
テープレコーダーの
繰返しの様に続くの
それでもいい。

同人略歴(3)

牛尾三千夫

明治40年4月5日　島根県邑智郡桜江町市山に生る。
昭和4年4月　国学院大学神道部に入学し、柳田国男、折口信夫に民俗学を、また釈迢空、見沼冬男に短歌の指導を受く。
昭和5年9月　広田栄太郎、井上究一郎、鳥山榛名らと短歌雑誌「装填」を創刊する。
昭和9年5月　帰郷して、神楽、田唄の採訪に専念する。
昭和36年4月　友久武文、湯之上早苗らと、田唄研究会を広島大学文学部内に置き、「田唄研究を創刊する。
昭和43年5月　「大田植と田植歌」を三弥井書店より刊行する。
昭和47年6月　「田植草紙の研究」(共著)を出版する。
昭和52年6月　民俗採訪記「美しい村」を刊行する。
昭和58年3月　「続美しい村」を刊行。
昭和58年7月　詩歌集「桔梗の空」自家出版する。

河村純一

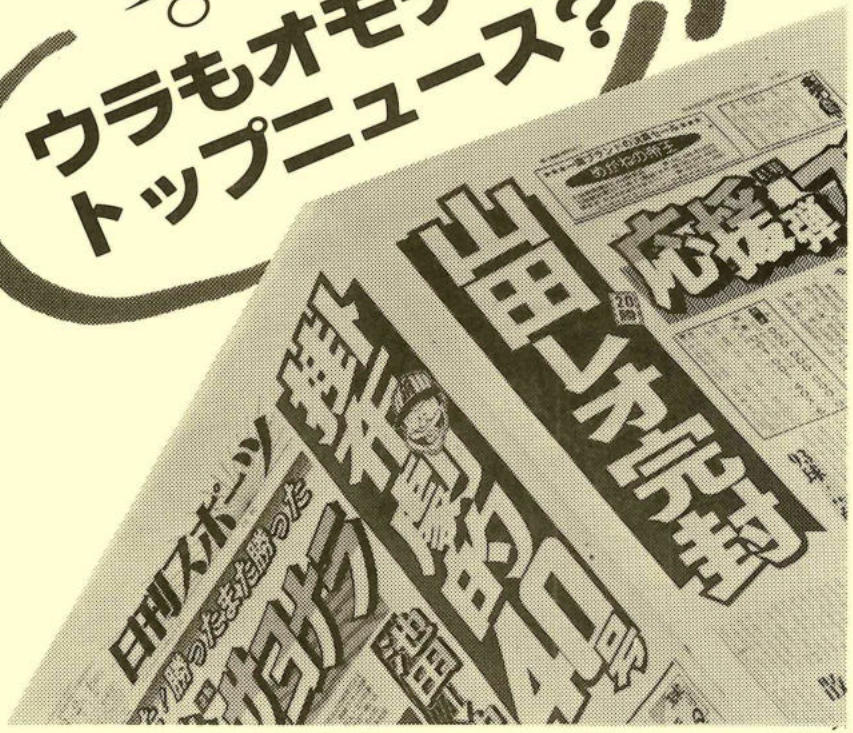
明治44年　彦根市に生る。彦根中学、三高卒。
昭和12年　京大医学部卒。
昭和14年　応召。大津陸軍病院、南方軍総司令部。
昭和20年　シンガポールに於て歌誌「青垣」の橋本徳寿を識り入門。
昭和21年　復員、「青垣」に入会。
昭和23年　彦根市に於て内科医院開業。
昭和45年　歌集「曲肱」(短歌研究社)刊行。
昭和56年　廃業。
昭和58年　歌集「近江にて」(至芸出版社)刊行。

同人名簿

順不同
＊は名誉同人

＊植村清二	176	練馬区桜台6－8－5
岩崎昭弥	502	岐阜市近島232
＊石山直一	559	大阪市住之江区住之江1－3－10
＊牛尾三千夫	699-42	島根県邑智郡桜江町市山474
＊小高根太郎	156	世田谷区経堂5－3－17 キャニオンコープ第一経堂101号(仮寓)
高橋しげおみ	305	茨城県新治郡桜村吾妻2－709－401
福地邦樹	578	東大阪市新庄241－17
江頭彦造	167	杉並区下井草2－16－12
川村欽吾	036	引前市豊原2－3－35
＊小杉茂樹	421-05	静岡県相良町波津762－2
伊達温	565	吹田市尺谷24－5
＊野田又夫	602	京都市左京区松ケ崎三反町5
坂口允男	630	奈良市高畑大道1232
金井寅之助	670	姫路市野里慶雲寺前町707
石濱恒夫	558	大阪市住吉区墨江2－5－6
＊松枝茂夫	167	杉並区本天沼2－37－21
山住正己	166	杉並区阿佐谷南1－38－2
＊藤沢桓夫	558	大阪市住吉区上住吉2－12－4
＊高田瑞穂	157	世田谷区成城2－4－20
田井中弘	520-03	大津市伊香立下在地町914
＊矢野峰人	158	世田谷区深沢2－14－17
＊浅野晃	151	渋谷区本町3－32－1－1004
田中克己	166	杉並区阿佐谷南1－40－8
＊河村純一	522	彦根市中央町7－5
高橋渡	158	世田谷区奥沢1－63－5
花井たづ子	176	練馬区旭丘2－36
大東幸子	574	大東市諸福3－6－10
大野沢緑郎	235	横浜市磯子区上中里町1028－3－311
藤野一雄	522	彦根市本町1－8－27
森亮	572	寝屋川市木屋町10－18
国友則房	184	小金井市本町3－1－20

あっ。
ウラもオモテも
トップニュース？



装いもあらたに。新紙面で登場！
明るい家庭のスポーツ紙。

日刊スポーツ

大阪日刊スポーツ新聞社
代表取締役社長　安　竹　一　郎（大高15回文甲）
TEL.06－862－1011㈹

同人規定

1．同人は田中が『四季』にふさわしい作家を選び、毎号のせることとする。
1．老大家＊以外は同人費として投稿毎に2,500円（送料共）を納めること。
1．なるべく常用漢字、常用かなづかいを用いること。（短歌・俳句・川柳・引用文等は別にする）
1．当雑誌を各方面に広く配布してもらい、売却金を刊行元に送金してもらいたい。（郵便振替　東京8-132924四季社・送料引）
1．同人に適当な人があれば紹介してほしい。

会員規定

○　会員は男女職業年齢を問わない。
　旧『四季』を閲覧し、堀辰雄氏を愛した経験あるものに限る。
○　なるべく常用漢字、常用かなづかいを用い、創作であること。
　（2ページ分が望ましい）
○　会員費として4ケ月分2,000円（送料200円）を、振替　東京8－132924　四季社まで納入してほしい。
○　同好者を誘ってもらいたい。
○　詩を送ってもらいたい。（締切　8月末日）

季刊　四　季　第七号　定価300円（送料200円）

発行　四季社
〒166　東京都杉並区阿佐谷南1－40－8　田中克己方
電話　03－314－2783
印刷　有限会社　カルチェ・プロ
〒532　大阪市淀川区西宮原1－6－60　電話06－391－3133㈹